

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

東シナ海底魚類

キグチ		<i>Larimichthys polyactis</i>
シログチ		<i>Argyrosomus argentatus</i>
ハモ		<i>Muraenesox cinereus</i>
マナガツオ類	マナガツオ	<i>Pampus punctatissimus</i>
	コウライマナガツオ	<i>Pampus echinogaster</i>
エソ類	ワニエソ	<i>Saurida wanieso</i>
	トカゲエソ	<i>Saurida elongata</i>
	マエソ	<i>Saurida macrolepis</i>
	クロエソ	<i>Saurida umeyoshii</i>
カレイ類	ムシガレイ	<i>Eopsetta grigorjewi</i>
	メイタガレイ	<i>Pleuronichthys cornutus</i>
	ナガレメイタガレイ	<i>Pleuronichthys japonicus</i>



キグチ

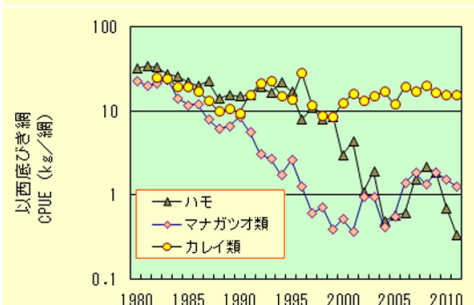
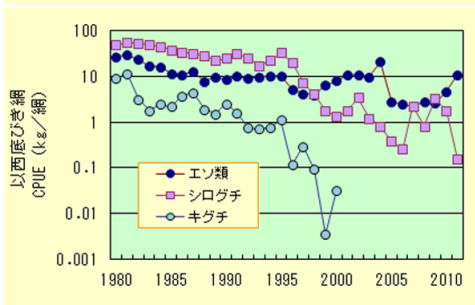
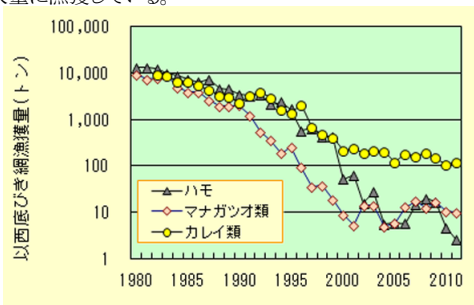
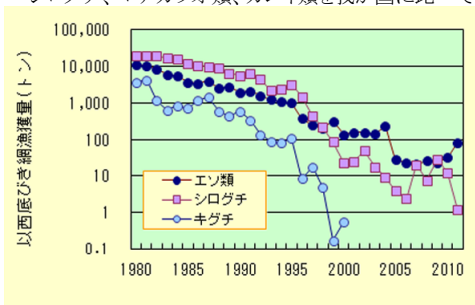
系群名 東シナ海
担当水研 西海区水産研究所

漁業の特徴

主に以西底びき網漁業によって漁獲される。以西底びき網の漁場はかつて東シナ海・黄海の大陸棚上の広域に及んでいたが、現在では主に我が国EEZ内の海域に縮小した。さらに近年では九州西方の東シナ海北部海域に漁場が集中している。主要対象種も大きく変化し、現在ではキグチ、イボダイ類、イカ類等が大きな割合を占め、本報告で対象としているグチ類、ハモ、マナガツオ類の占める割合は小さくなっている。

漁獲の動向

以西底びき網漁業の漁獲量は、1960年代には30万トン以上であったが、1970年前半にはおよそ20万トンとなった。我が国の漁獲はその後も漸減し2011年には約0.7万トンとなっている。東シナ海底魚類を最も大量に漁獲している中国は1990年代に漁獲量が著しく増加したが、近年の漁獲量はほぼ横ばいとなっている。韓国も2011年ではキグチ、シログチ、マナガツオ類、カレイ類を我が国に比べて大量に漁獲している。



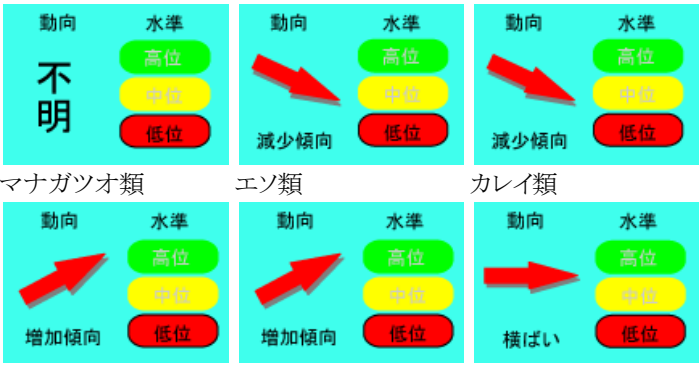
資源評価法

水準に関しては以西底びき網漁業の漁獲統計(主に2そう曳き)を解析し、資源の変動傾向を検討した。資源動向に関しては東シナ海大陸棚上における本系群の近年の情報が非常に乏しいため、近年の以西底びき網漁業の主漁場の動向について検討した。東シナ海の陸棚縁辺部において行った着底トロールによる漁獲試験から算出した現存量推定値と以西底びき網漁業におけるCPUEとの相乗平均値を資源量指標値として用いた。

資源状態

以西底びき網漁業による本系群の漁獲量の長期的な変遷、およびCPUEの長期的な変動傾向から、資源水準を推定した。いずれの種についても1990年代までに大きく資源水準が低下したうえ、近年の中国や韓国の漁獲動向も良好とはいえないことから、資源水準を低位と判断した。東シナ海大陸棚上における近年の情報が著しく不足していることから、本系群全体の傾向を判断することは困難である。我が国EEZ内の海域において、資源量指標値の傾向から、シログチは減少、ハモは減少、マナガツオ類は増加、エソ類は増加、カレイ類は横ばいと判断した。特定の動向を判断するのは困難なことから、キグチは不明とした。

キグチ シログチ ハモ



管理方策

本報告で対象とする種では、産卵場を含む主分布域が我が国EEZ外に存在する。我が国の漁獲努力が著しく減少している一方、中国と韓国はこれら資源を大量に漁獲しており、東シナ海における有効な資源管理のためには、関係各国の協力体制の構築が必要である。近年の以西底びき網漁業の操業海域において、本報告で対象とする東シナ海底魚類に対する漁獲努力が、対象資源に与える影響はあまり大きくないと考えられるので、資源の増減傾向に合わせて漁獲することを資源管理目標とするのが妥当である。

資源評価のまとめ

- すべての資源が低位水準で、資源状態は良くない
- 東シナ海陸棚域の資源状況については、近年の動向を判断する詳細な情報が少ない

管理方策のまとめ

- 問題の根本的解決には東シナ海全域での関係国間の協力が不可欠
- 我が国の漁業の現状の努力量が対象資源に与える影響は、あまり大きくないと考えられる
- 近年の以西底びき網漁業の操業海域においては、資源の密度に応じた漁獲を続ける

執筆者: 塚本洋一・酒井 猛

資源評価は毎年更新されます。